九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「根っこ」序説 ： 夢論／南島論／ヤポネシア

Breaden, Barnaby
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

https://doi.org/10.15017/8349

出版情報：九大日文. 1, pp.159-166, 2002-07-25. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

「根っこ」序説 I

～夢論／南島論／ヤポネシア～

Barnaby Breaden（バーナビー ブレーデン）

① はじめに

近代及び現代に於いて、「南島」の言説と「夢」の言説とが似ている。本稿の第一の目的はこの感想の敷衍と追窮の可能性を示すことである。

「夢」も「南島」もフィクションである。本稿の主題は文学であるが、しかし狭義での文学批評ではない。ここで問題にしていきたいのは、或る特定の歴史的・地政学的文脈に於ける記述の在り方である。この記述に於ける「言力」の問題――最も広い意味での修辞学的な問題――に特に注意したい。日本（ヤマト）による「南島」の言説化は近年広く注目を浴び、批判され再検討されつつあるが、その中、記述の歴史化や記述者の活動の系譜化だけでなく、個々の記述の機能――働き、レトリック、語り口――及び間テクスト的な空間に於ける表象の形成は、もう少し緻密な考察に価するのではないか。そしてまた、そのレトリックをもう少し広い問題編成を以って考える必要はないだろうか。

本稿では、「南島論」の問題を考察するに当たって、いわば、少しずれた問題編成――「夢」の言説と重ね合わせることによって意図的にずらした問題編成――を用いてみることにしたい。そして、「夢」言説の扱い方も逆に「南島」論的な要素の導入によって同じく影響される。

「夢」の言説も「南島」の言説も様々な分野を跨る。本稿の中心となる学術的言説だけに限っても、言語学、歴史学、民俗学、民族学、文学、心理学など種々のフィールドに於いて繰り広げられる。尚、特に「南島論」に関しては、一方では近世の航海記・風土記・紀行、他方では近年のアジア・ブームに於けるマスコミの沖縄の宣伝・報道のし方にも関連してくる。これらのジャンルに属するテクストは、用語・規定・流通のし方がそれぞれ異なるが、しかし「南島」の言説的空間に於いては交わりあい、影響しあう。「夢」の言説に於いても、意味の流通は間ジャンル的、間言説的、間時代的な規模で起こる。文学は歴史学地政学的な影響から自由でもなければ、また歴史学地政学も決して文学の影響から自由ではない――本稿で注目する島尾敏雄の「夢」論や「ヤポネシア」論に於いてこの繋がりは特に顕著である。「ヤポネシア」言説の広がりを荒瀬豊のように「沖縄協定というかたちでの第三次日米安保条約をひかえていた一九六〇年代の日本の思想が生んだ一つの重要な遺産」*1として限定することも難しいが、一方「現実の歴史も空間も関係ない、ひとつの運動の力学」という東琢磨の所見*2に対しても違和感を覚える。一九七七年の対談の中で、奥野健男は「ヤポネシア」を「島尾敏雄さんのきわめてユニークな文学的な表現」または「文学者にしかつくれない詩的な言葉」として述べるが*3、地政学、歴史学、文学的な言説が入れ混じる「ヤポネシア」言説の展開は、先ず、文学というジャンルを地政

学から、そして逆に地政学を物語の「言力」即ち書き方＝語り方の問題から分離不可能な流動体として見せてくれる。

次号に於いて、まず、広く「モダニズム」と呼ばれる歴史的・学術的・思想史的・地政学的な文脈に於ける「夢」「南島」の記述の在り方、その類似性や接点に着眼する。次に、「夢論」と「南島論」という二つのジャンルに共通するものから出発して、日本の「モダニズム」に於ける特殊な運動を探っていく。この運動を、島尾敏雄の言葉を借りて、「根っこ」と呼ぶ*4。

「根っこ」は実体ではない。また何か別のものの隠喩・メタファーでもない。「根っこ」は、むしろ、メタファーという運動そのものである。何かを移す、何かをあちらからこちらへと運んでくるメタファーである*5。「夢論」と「南島論」をはじめ、日本の「近代-現代」の様々な言説体系を貫くベクトルの総称である。「根っこ」は実体ではなくて運動、ものではなくてことである。島尾敏雄の表現を借用するのはこのためである。「ヤポネシア」の中の「根っこ」――即ち琉球弧――は、何故「根っこ」かといえば、「根っこ」のような場所だからではなく、「根っこ」のように機能するからである。つまり、「根っこ」として日本列島の構造に働きかけて来るためである。「根っこ」は、端的にいえば、「近代」の形成プロセスに於いて生起し、逆に「近代」（や、「近代」の中の「反・近代」）を問題化する手がかりともなり得る。こういう意味で、「近代の夢論」「近代の南島論」だけではなく、「夢論的な近代」や「南島論的近代」というような思想史的分類の可能性をも検討していく。

「夢」の言説、及び「南島」の言説に於いて、「根っこ」の傾向は度々「深層」の措定に関連して現れる、しかし「根っこ」は「深層」と同義ではない。「根っこ」は「深層」の可能性を「表」（おもて・うわべ・しるし・配列）として見せてくれるのである。別の言い方をすれば、「根っこ」は「深層」「古層」という形で現存（現在・現前・現実）の差異を現存の中から表現してくれる。「根っこ」は現存にとっての宝物である。しかし「根っこ」が必ずしもおとなしく真っ直ぐ伸びるのではない。島尾敏雄の所謂「夢物」・「南島物」は「根っこ」の典型を示すと同時に、「深層」の措定の憑依する不安と恐怖をも言説化する。「根っこ」の言説は「おそれ」の言説でもある。

②発掘＝解明

同一性（アイデンティティ）の考古学がいつ、どこで、どういうきっかけによって発生したかという問題に関して私はあまり関心がない。少なくとも、知（サヴォワール）の考古学よりは古いだろう。人間の心の中に地層を想像して、上と下、表と深、新と古を同じ図式の上に重ねてうつし、更に民族国家をこの同じモデルを以って考えるようになった起源の探索は私のここでの試みとは無縁である。私の目的はこの考え方の相対化でも系譜化でもない。同一性（アイデンティティ）の考古学は実体でも仮定でもなく、本稿で扱う様々な記述に於いて具体的に現れる一つの傾向、一つの思考パターンである。意味（同一性（アイデンティティ））も一種の意味）を、貝塚のように、時代時代の食い残しの累積のように考えるこの傾向の調査は、次号以降、本稿の課題の一つと

したいが、ここでは、取りあえず、本稿に於けるその主な特徴を大観しておこう。

ここで先ず興味深いのは、近・現代の人文科学に於いて、この地層の想定と真偽との関係である。これは、簡単に言えば、下に向かって掘れば掘るほど、或いは――ここでは同じことを指すが――古に向かって遡れば遡るほど、何か同一的な本質若しくは根源（魂・基層・心・声）に接近し得るという認識である*6。解明することとは、意味を突き止めることであり、意味の広がりを限定することである。表層は広がり、深層は収斂する。

深層は隠された（埋もれた）もの、発掘＝解明すべきものとして措定される。敷衍して言えば、発掘＝解明の言説に於いて、隠された（埋もれた）深層は同一性（アイデンティティ）の見透された可能性として表現される。この見透しとしての深層の措定が最も顕著な形で物語化されるのは、恐らく、深層心理学の言説に於いてであるが、本稿全体を通じて見ていくように、テクストの見透された意味（絨毯の模様）、文化・民族の見透された同一性（アイデンティティ）（意味としての同一性（アイデンティティ））に於いて同じように機能する。

ドイツの発掘家マルティン・ハイデッガーが非・隠蔽（アレーテイア）と呼ぶ開明*7は、露わに発くことによって、真理の可能性を示す。ハイデッガーはアリストテレスの技術論（テクネー）に関して次のように論じる。

テクネーは、アレテウエーン（露わに発く）の一つの在り方である。それは、自分自身で出で＝来たらす未だ眼前にはなきもの、従って色とりどりな見え方をとって結末をつけるであろうものを、露わに発くものである。家とか船を建造したり或は供物の皿を寿造したりする人は（略）出で＝来たらすべきものを露わに発く。かく露わに発くということは、船や家の見え方と材料とを、既に完成したものとして見透された仕上がりの物へむかって、あらかじめ纏め、そこからその仕上げ方を定めることである（「技術への問い」*8）。

発掘家は深層を暴露すべきものとして想定する。スーザン・ソンタグは一九六〇年代後半の欧米の文学批評に於ける解明志向を「発掘」として批判した。解明志向とは、つまり、「本文の『裏側』を掘って、裏の本文である『背後の本文（サブ・テクスト）』を見つけようとする」ことであるが、ソンタグの指摘によれば、このような批評の狙いは、テクストを掘り下げて、隠れた潜在的な「深層」としてのサブ・テクストを解明することにある。この傾向がフロイトの夢判断に於いても顕著だということも既述の通りである。「観察しうるすべての現象は、フロイトに言わせると、『明確化された内容』として一括される。この明確化された内容を掘りさげ、そしてこれを押しのけて、その下にある真の意味――『隠された意味』――を見出さなければならない」*9。「夢」論・「南島」論に於ける深層観念（夢の中の「たましい」、或いは日本の「埋もれた古層」としての「南島」）は同じような隠された（埋もれた）意味を見出そうとする解明志向の生産物に他ならない。逆に言えば、「夢」論・「南島」論・文学論のいずれに於いても、発掘解明の大前提となるのは、より根源的・より不変的な芯（＝真？）として見いだされる深層（＝真相？）の措定である。発掘家は予め見透された深層の可能性に向かって、それを解明する（露わに発く）必要性を呼びかける。深層は発掘＝解明によって見出されるのではなく、発掘＝解明の前提として想定される*10。読書とは

地政学的な行為である。言説の隠喩的解釈は隠れた深層の発掘＝解明である。去年出版されたフーコー解釈書の表紙を見れば、「全く古びることのない思想の新たな『地層』を掘り起こす」と大きく書かれてある[*11]。

③　呼びかけの機能

私は記述して、指摘する。私は問題への注意を呼びかける――「ほら、こうじゃないか」「ほら、ここを見たまえ」。しかし、「ほら」「見たまえ」と呼びかける私は、どこから、読者とどのような関係を結んでいるだろうか。本稿に於いての私の呼びかけに限っていえば、或る程度問題点を見分け得る地点から、その問題を考えていく。呼びかける私は目的地が見得る地点に立っている――そうでなければ、「ほら、見たまえ」と呼びかけられるはずがない。しかし一方、呼びかけは不在或は欠乏をも意味する――「ここを見たまえ」は、ここの重要性とともに、ここを見られていないことに対する指摘である。ここという呼びかけの目的地に関しては、まだ、何も確かなことはない。「ここを見たまえ」「こうじゃないか」と呼びかける私も、まだ、ここには到達していない、こうはまだ私も為遂げてはいない。呼びかけは距離を表わす。ここでいう「呼びかけ」はハイデッガーの「呼び声（Ruf）」と様相を異にするが[*12]、無縁ではない――「呼び声は接近を呼びかける（中略）しかし遠く離れたものに発せられた呼び声は、逆にそれを遠隔のものとして位置付ける」[*13]。呼びかけはその主題を可能性として顕現する。言い換えれば、呼びかけという技法によって露わに発かれるのは「見透された仕上がりの物」という可能性にほかならない。私は呼びかけをしながら、登場しようとする。

別の言い方をしてみよう。呼びかけの主題が顕現（登場-生起-到来）してしまえば、呼びかけは呼びかけではなくなる。つまり、呼びかけという修辞的技法には、その主題の到来を延期する――遠隔のものとして位置付ける――機能がある。出で＝来たらすべきものの可能性は既に見透されているが、到着するまでの道のりはまだまだ長い。

発掘＝解明には不安がつきものである。発掘に臨む者がひそかに恐れるのは、ついに発掘されてしまうものが、ひょっとして、深層＝真相ではないかもしれないという可能性である。表層という偽りの上皮を掘り下げても、その下にはまた偽り、また捏造――ただのフィクションだけしか隠れていないかもしれない……しかし発掘の不安はこの問題だけにはとどまらない。発掘に臨む者にとって最も恐ろしい可能性は、ついに暴露されてしまうものが、何も予期していた深層ではなく、全く見透され得ない異――怪異としての異――であるかもしれないという可能性である。ジャック・デリダの著作の中で、ニーチェの『人間的な、あまりに人間的な』の呼びかけは或る特殊の可能性として記述される[*14]。デリダは到来の可能性の表現として、「恐らく」[*15]という言い方に着目し、これに「arrivant」（「到来しつつある」または「到来者」）という語を重ねる。「恐らく」とアリヴァンの示す可能性は、決して事象に於いて定められた確率ではなく、寧ろ行為を修飾する副詞的な可能性である。到来しつつある（アリヴァン）・到来者（アリヴァン）は、まだ到来していない――到来してしまわずに、常に到来しつつある――が、一方、到来者として、つまり到来の化身として、常に、そして既

に到来を可能性として示す。

到来するものは、恐らく、ただこれとかそれとかだけではないだろう――いよいよ到来するのは、「恐らく」の思考、「恐らく」そのものではないか。到来者（アリヴァン）は恐らく来るだろう（到来性のことだから、確実ではないが）――到来者（アリヴァン）は、ひょっとして、「恐らく」の未曾有の、全く新しい経験かもしれない。前代未聞の、全く新しい経験――形而上学者たちが敢えて考えないことにしているあの経験である。

「恐らく」という怪物*16――この恐るべき到来者（アリヴァン）――は非・現実としての（リーブニツ的な）可能性を克服するものであるが、一方確率とも対立する。「ただ単に可能であるだけというような可能性（いわば非・不可能性、事前に予想され得る確かな可能性）は不毛な可能性――準備されて、いわば保証された可能性に過ぎないのである」。

デリダの問題編成は、ハイデッガーと同じで、アリストテレスが言ったと思われていることの記述という、西洋的な、あまりに西洋的な正典（カノン）である。デリダの狙いはこの正典の新しい系譜・系統（ジェネアロジー）の形成にあるが、本稿では、到来性（アリヴァンス）の思考が問題化してくれるのは、先ず、私たちの書く技術に於ける「ほら、ここを見てみろ」という呼びかけの機能である。換言すれば、ここ（目的地）の非・隠蔽性（アレーテイア）、ここを可能性として顕現させること――ハイデッガーの言葉でいえば、「見通された」もの（＝「出で＝来たらすべきもの」）として「露わに発く」ことの問題化である。

さて、私が、ここで、このあまりに「西洋的な」――即ち「西洋」のイメージ形成に於いてあまりに重要な――正典（カノン）を持ち込んで来た動機を、本稿の読者たる私たちは疑わなければいけない。少なくとも、アレーテイアやアリヴァンスなどに普遍的な意義を求める志向には疑問を抱かなければならない。

本稿の文脈に於いて、「露わに発く」というのは、「書き」の非常に特殊な技術である――つまり、同一性（アイデンティティ）の創出に於ける発掘＝解明の技術である。以上述べたように、「ほら、ここを見たまえ」というここには、私も到達していない。到達していないからこそ、呼びかけるのである。呼びかけの主題と私とあなたとの間隔を、私の呼びかけは飛び越えて、「見透された仕上がりの物」というここ・これにこだまする。

暴露が何か見透された――普段見えない――ものを前提とすると同じように、発掘＝解明には何か埋もれた――隠された――ものの措定が必要である。次号より、この議論を様々な文脈に於いて、様々な観点から発展することにしたい。

暴露（非・隠蔽性（アレーテイア））とは違って、発掘＝解明を施す者は常に或る特定の方向（下）を目指して、深層または下層を掘り起こして解き明かそうとする。下への発掘が即ち昔への遡行を意味し、深層が即ち古層を意味するという興味深い関係性の歴史的追究は、既述の通り、本稿の課題ではないが、ここでは敢えて考古学的な関係性と呼ぶ。この考古学的な関係性について、幾つかの大きいな特徴を指摘できる。歴史的時間を地層として見るには、まずは人間の歴史を連続的な継起として想像し（この点に於いてフーコーの『知の考古学』が示唆的）、そして、これを或る特定の場所（無意識・地方・民俗・文学）に積み重なる層として見る必要が

ある。一口でいえば、発掘＝解明に於いて、「深層」と「古層」は同義である。進化論の〈第一原理〉は多様化である、しかし多様化と腕を組んで仲良くやって来るのは同一的な基層または母体のイメージである。「母体」は発掘家の隠れた宝物である。

④　「読み」と「書き」

本稿の内容は狭義での解釈ではない――少なくとも、言説的地層の発掘ではない。ここで展開したいのは、「夢」と「南島」の記述を中心に、様々な言説-体系の「読み」である。「読み」とは暴力であり、言説空間への侵略である。「読み」は常に部分的かつ偏向した観点を呈出する。「読み」はアルチュセールの『マルクスのため』の中での言い方を借りれば、或る特定の問題編成の創出をも意味し、記述に於ける選択と視点の確立という二つの行為と不可分な関係にある。本稿に於ける「主な」または「代表的な」という言い方は、私（呼びかける私）の特定の視点から行われていくこの選択プロセスの表現である。

「読み」とはすなわち「書き」であり、文章の作成であり、表象の組み立て行為である。次号より、私は「夢」論、「南島」論という言説-体系を、このような「読み」に於いて組み立てていく。

ドゥルーズは言説を症候群、記号を徴候に例える。症候群（言説）という徴候（記号）の群れに対して、文学作者は診断する医師の役を務める――ダウン症候群や川崎病と同じように、カフカ病、島尾症候群。症候群としての言説は常に作者の私的な問題に還元し得ない、歴史的、地政学的な面を有する*17。ダウン症候群も日本では、昔、「蒙古症」と呼ばれていた。フランスの構造主義学界は作者を殺した。作者の死を宣言することはテクストに於ける意味の所有権の独占主義を顛覆するのに有効な手段であったに違いない。「作家の刻印とは、もはや作家の不在という特異性でしかない。作家はエクリチュールの遊びのなかで死者の役割を受け持たねばならない」（フーコー「作者とは何か」*18）。固有名を、つまり、もはや個人でもない故人の名前、――私たちのために残された特定の文献、言説、書き方の総称――として考えることは、その固有名の付いた思想体系を措定するのに極めて好都合である。「われわれにとって彼はもはや一個人ではない、いまや一種の知的風土となった」*19とイギリスの詩人 W.H.オーデンは死んだフロイトに詠んだ。しかしそもそも作者の死を待つ必要はない――フロイトや河合隼雄が述べるような（ロマン主義的な）「西洋人的自我」の幻が「知的風土」の中に溶解してしまったのは疾っくの昔のことであろう。「島尾敏雄」の言説を専ら島尾敏雄という「個性」に還元することは、特に対談や批評の関わりが多かった「夢」や「ヤポネシア」言説の場合、無意味に近い行為である。私たちの間に、島尾症にかかっている者は少なくないだろう。

私のここでの仕事は、まず、言説空間の再編成である。本稿の主題を「文学」とするのはこの所以――文学テクストに於いて、このような言説空間の再編成が常に行われているからである。次号より、近代の「夢論」と「南島論」の歴史を大観して、この二つの言説に於ける傾向や運動――いわば、「夢論」と「南島論」の文法――に対するいくつかの「読み」を試演する。

⑤ それから

「夢」や「南島」はそもそも文学のようなものではない。「夢」といっても常に夢の記述であり、「南島」にも、実際の沖縄、奄美の様相には還元し得ないところがあるが、しかし「実際の夢」「実際の琉球諸島」という指示物（実体）の観念が記述の前提となる。一方、文学に於いて、このような指示物の前提を認められない場合が多い。文学批評の暴力はこういう意味で記号に向けられた暴力の典型である。

本稿では、「夢」や「南島」の記述に於いても、いわば、指示物を括弧に入れて、記号への暴力を問題にしたい。しかしこのアプローチに於ける地政学的な含みを忘れてはいけない。特に「南島」の場合、（実際の琉球諸島）を括弧に入れることは「南」へのまなざしを遮り、逆に日本本土の方へと向けなおすことをも意味する。

この地政学的な構造に於いて私は厳密にいえば当事者ではない。しかし決して傍観者の安全な地点に立っている訳でもない。全ての記述が暴力行為である、そういう言説に於いて記述者（発言者・執筆者）は皆暴力行為の関係者にちがいない。「書き」の舞台に登場する私――私自身――もスポットを浴びなければならない。船から降りて、浜の砂に足跡を残したその瞬間から、私たちも皆傍観者ではなく関係者として、必然的に自らの「書き」の枠の中に入ってしまっている。本稿の話はこの私たちの話である。

【註】

*1 荒瀬豊「ヤポネシア、沖縄そして日本」（島尾敏雄編『ヤポネシア序説』創樹社、一九七七年二月）一一八頁。この論文は一九七二年七月『現代の眼』に発表された。

*2 東琢磨「きっかけとしての『ヤポネシア』」（『ユリイカ』第三十巻第十号、一九九八年八月）二〇四頁。

*3 『ヤポネシア序説』（一九七七）第四部、島尾敏雄と奥野健男との対談「深層の日本〈ヤポネシア〉へ！」冒頭。「ヤポネシアというのは島尾敏雄さんのきわめてユニークな文学的な表現から生まれ、たちまち流行語になり、今度は正式な学問の名前になってしまったと思うのですが、今日はそういう文学的な言葉がすぐそうなっちゃうのですね。ぼくのことを言うのは恐縮なんですが、ぼくが『原風景』なんていう言葉を苦しまぎれにつくって本の題名にしたりしたら何かいつのまにかいろんなところで当り前に使われたりする言葉になっていることもあるのですが、それはともかくヤポネシアの方がもっとすさまじい。」（一九九頁）。奥野は後に「やっぱりこれは文学者にしかつくれない詩的な言葉ですね」とも述べる（二〇一頁）。

*4 島尾敏雄「ヤポネシアの根っこ」（『世界教養全集』一九六一年一二月）。

*5 「メタファー」は「移す」「運ぶ」という意味のギリシャ語 μεταφορά (metaphorá) に由来する。

*6 このような構造をドゥルーズとガタリはピボットの意味を含めて「直根（ピヴォタン）」と呼ぶが、氏等の議論については、次号以降、「根っこ」の話に関して再び触れることになる。

*7 明るみに出されるという意味での開明――「認識するということは、

開明（アウフシュルッス）することである。それは開明するものとして、露わに発くことである」。マルティン・ハイデッガー『技術論』小島威彦訳（理想社、一九六五年九月）二八頁。

*8 同上、二八～九頁。

*9 スーザン・ソンタグ『反解釈』高橋康也ほか訳（竹内書店新社、一九七一年六月）一七頁。

*10 「表層」について――表層は深層の措定の副産物であり、表層と深層という相関概念に於いて所謂第二の項の役を演じる。言い換えれば、表層は深層があっての表層であり、深層的な本質を覆って隠す仮面、根源的な同一（アイデンティティ）性をぼやかしてしまう雑音として記述される。深層が真相とされる場合、表層は逆に偽りとして映る。予めある表層を掘り下げて深層を明かすというよるも、むしろ深層を措定することによって、自明な表層は隠れた深層を覆う顕著なうわかわとして創出されていく。

*11 「フーコーに対する様々な批判を手がかりに、全く古びることのない思想の新たな『地層』を掘り起こす」、柳内隆『フーコーの思想』（ナカニシヤ出版、二〇〇一年十月）。

*12 まず、第一にここでいう「呼びかけ」とは「書き」に於ける修辞学的ないしは文学的な問題であり、「声」ではない。

*13 「言葉への途上」（亀山健吉、ヘルムート・グロス訳『ハイデッガー全集』第十二巻、創文社、一九九六年十月）。

*14 Jacques Derrida, *Politiques de l'amitié*（「交友の政治学」）、（Paris: Editions Galilée, 一九九四年）二九～三九頁参照。本稿中の訳は引用者による。

*15 原文では「vielleicht kommt」――「おそらくだれもまたいつかもっとたのしい時がきて、そのとき彼はいう、『友らよ、友というものはないのだ！』そう死んでいく賢者（アリストテレス―筆者）が叫んだ、『敵らよ、敵というものはないのだ！』――生きている愚者のわたしは叫ぶ」（『人間的、あまりに人間的』三七六）。

*16 *Politiques de l'amitié*,四三頁参照。また、『グラマトロジー』に於いて次の記述がある。「未来は、絶対的危険という形でしか先取りされ得ない。それは、構成された正常性とは絶対的に縁を切るものであって、それゆえ、一種の畸型としてしか自身を予告し、現前させることができない」ジャック・デリダ『起源の彼方に―グラマトロジーについて』上巻、足立和浩訳（現代思潮社、一九七六年六月）十八頁。

*17 島尾敏雄自身が一九六二年のエッセイの中で述べるように、「自分が書いたからといって、あとでその書いたすべての部分を管理できるものでもない。むしろそれは自分の手からはなれて遠くの方に出かけて行ってしまい、それを書いたときの自分の頭脳のからくりがどうなっていたのか、ふしぎな気持になるほどだ」（「次の白い頁に」『島尾敏雄全集』第十四巻、晶文社、一九八二年）八四頁。

*18 『ミシェル・フーコー思考集成』第三巻（筑摩書房、一九九九年七月）二二九頁。

*19 「To us he is no more a person/ Now but a whole climate of opinion/ Under whom we conduct our different lives/ Like weather he can only hinder or help」。「In Memory of Sigmund Freud」一九三九年、（W.H. Auden, *Collected Poems*. Faber & Faber, London: 1976）二十六頁。引用者訳。